こんな本があります　明治・大正 渋谷の文学を知る本

分類	資料名	編著作者	出版者	出版年
S33	渋谷の文学		渋谷区教育委員会	1978
S33	新渋谷の文学		渋谷区教育委員会	2005
S33	渋谷区文学地図	渋谷区立渋谷図書館	渋谷区立渋谷図書館	
S33	渋谷と文学　区所蔵文学資料	渋谷区郷土博物館等開設準備会	渋谷区教育委員会	1998
S33	与謝野寛・晶子年譜　東京新詩社・明星関係	新川　一男／編	渋谷区立渋谷図書館	1980
S33	与謝野晶子の世界　第１号（通巻 26 号）10 年 12 月		与謝野晶子倶楽部	2010
S12	新修渋谷区史 中巻 明治文学にあらわれた渋谷 p1881 大正文学にあらわれた渋谷 p2072	渋谷区	渋谷区	1966
文学作品				
東京の三十年（岩波文庫）		田山　花袋／著	岩波書店	1981
武蔵野（岩波文庫） 武蔵野（新潮文庫）		国木田　独歩／著	岩波書店 新潮社	2006 2012
幼年（文春文庫） 幼年（講談社文芸文庫）		大岡　昇平／著	文藝春秋 講談社	1982 1990
少年（講談社文芸文庫）		大岡　昇平／著	講談社	1991
渋谷道玄坂		藤田　佳世／著	弥生書房	1977
大正・渋谷道玄坂（シリーズ大正っ子）		藤田　佳世／著	青蛙房	1978
国木田独歩全集　全 10 巻		国木田　独歩／著	学研	1964
田山花袋全集　全 16 巻 定本花袋全集　18 巻～28 巻・別巻		田山　花袋／著	文泉堂書店 臨川書店	1973 1994
蘆花全集　全 20 巻		徳富　健次郎／著	蘆花全集刊行会	1928
鉄幹晶子全集　第１巻～31 巻 与謝野晶子全集　全 13 巻 定本與謝野晶子全集　全 20 巻		与謝野 鉄幹・晶子／著 与謝野　晶子／著 與謝野　晶子／著	勉誠出版 文泉堂 講談社	2001 1976 1979
大岡昇平全集　全 15 巻 大岡昇平集　全 18 巻		大岡　昇平／著	中央公論社 岩波書店	1973 1983

参考文献：『新渋谷の文学』『与謝野寛・晶子年譜』ほか上記図書を使用しました

しぶや、あの日 あんなこと そして こんな本
― 渋谷区地域資料通信 7 ―
2020 年 10 月 20 日
編集/発行　渋谷区立中央図書館　　㈱図書館流通センター
渋谷区神宮前 1-4-1　　3403-2591
図書館ホームページ＞しぶやのページ
https://www.lib.city.shibuya.tokyo.jp/?page_id=209

しぶや あの日 あんなこと そして こんな本

渋谷区地域資料通信 7

与謝野晶子がいたころとあと

明治・大正 渋谷の文学地図

明治の初め、まだ武蔵野の田園風景が広がる渋谷に、明治 18 年（1885）日本鉄道品川・赤羽線が開通して渋谷駅が開業し、37 年の千駄ヶ谷駅、39 年には代々木・恵比寿・原宿駅が相次いで開業して宅地化が進みます。この頃から滝野川町田端や荏原郡馬込村に文士村が形成されていくように、多くの芸術家や文学者が東京市近郊に移り住むようになります。渋谷区域にも明治 29 年には国木田独歩が移り住んで『武蔵野』を著し、与謝野鉄幹が「本社は専門詩人以外に和歌及び新体詩を研究する団体」を掲げる「東京新詩社」を結成して、34 年に拠点を渋谷に移します。機関誌であった『明星』は終刊となった 100 号までが渋谷時代に発行され、その全盛期を築きます。新詩社には代表的歌人である与謝野晶子をはじめとして、窪田空穂・高村光太郎・木下杢太郎・吉井勇・北原白秋・石川啄木・小山内薫などの人々が名を連ねていました。また、短歌雑誌『アララギ』の大正期を支えた島木赤彦は、発行所の移転とともに大正 10 年（1921）に代々木山谷に居を構え、多くの歌人たちが集う所となります。渋谷に移り住んだアララギ歌人には、日本画家の平福百穂・民俗学者折口信夫として著名な釋迢空・今井邦子・岡麓・古泉千樫などがいました。

明治・大正期、渋谷に居住した著名な文学者は数多く、彼らが代々木や穏田といった郊外へ移り住んだのには、「東京でも代々木位の田舎に住めば、四〇円位で夫婦子供ともにくえる」と鈴木三重吉が手紙にしたためたように、都心部に比べて家賃が廉価であった一方、郊外生活への憧れといった趣もあったものと思われ、そのことは移り住んだ作家の多くの作品に郊外である代々木の風景について書き記しるされていることからもうかがわれます。

与謝野晶子
国立国会図書館所蔵

『新渋谷の文学』では、作品に出てくる場所や作家の旧地をめぐる６つの文学散策コースを案内しています。巡ってみてはいかがですか。

鈴木三重吉

豊多摩郡代々幡町大字代々木字初台598番地（現在の代々木３丁目3番）

大正７年（1918）に児童雑誌『赤い鳥』を創刊した三重吉は、明治44年（1911）に下渋谷に移って直ぐに結婚します。２ヶ月ほどで青山南町に移転し、大正２年７月に代々木字山谷143番地に移転して、すぐに初台598番地転居し5年まで住んでいました。

「春の小川」歌碑

渋谷区代々木５丁目65番

高野辰之が娘の弘子とよく散策した河骨川の風景をもとに作詞した、唱歌「春の小川」の歌碑が、はるのおがわコミュニュティパークと小田急線の間の河骨川暗渠沿いに建てられています。

臼田亜浪句碑

代々木５丁目１番１号（代々木八幡宮内）

碑に刻まれている句は「**そのむかし 代々木の月の ほととぎす**」

句誌『石楠』を創刊し、自由なリズムと生活感情に根ざす句により俳壇の因襲を批判した亜浪は、大正４年（1915）６月から昭和3年（1928）６月まで、代々幡町大字代々木山谷（現在の代々木３丁目）に居を構えており、句碑は昭和9年11月に代々木八幡宮境内に建てられました。

国木田独歩住居跡

豊多摩郡渋谷村大字上渋谷字宇田川154番地（現在の宇田川町７番）

国立国会図書館所蔵

独歩は明治29年（1896）9月から翌年5月までここに住み、親友の田山花袋らと付近を散策した印象をもとに『武蔵野』を著しました。「丘の上の家」と呼ばれたこの家の周辺のことは花袋が『東京の三十年』に詳しく描いています。独歩は31年9月頃から翌年4月頃まで千駄ヶ谷村大字原宿付近に住んでいたこともあります。

大岡昇平

豊多摩郡渋谷町大字中渋谷字大山716番地（現在の松濤２丁目14番）

大岡は東京市牛込区で生まれ、少年期の大正11年（1922）までの間に渋谷で氷川神社付近、渋谷駅付近、宇田川町、松濤と数回転居しており、この年に中渋谷716番地に移って昭和５年（1930）まで住んでいました。その自伝的作品『幼年』や続編の『少年』には、渋谷で過ごした幼少年期の日々が近辺の風景とともに克明に描写されています。

与謝野晶子がいたころとあと

明治・大正 渋谷の文学地図

まだ農村的な色彩を色濃く残していた明治前期の渋谷に、明治18年（1885）日本鉄道品川赤羽線が開通して渋谷駅が開業すると、徐々に宅地化が進み市街地へと変貌を始めます。この住宅地に国木田独歩をはじめ、前後して徳冨蘆花、与謝野鉄幹・晶子、田山花袋らが住んで多くの作品に渋谷を描き、明治期の渋谷の文学には、武蔵野の自然、風光とともに発展してゆく渋谷の風俗や生活、時代の移りゆきが色濃く映し出されています。その後の渋谷が急速に発展膨張していく大正期の市街地化の様子は大岡昇平、藤田佳世、秋庭俊彦らによって書き留められています。

多くの文学者が代々木や穏田といった郊外へ移り住んだのには、「東京でも代々木位の田舎に住めば、四〇円位で夫婦子供ともにくえる」と鈴木三重吉が手紙にしたためたように、都心部に比べて家賃が廉価であった一方、郊外生活への憧れといった趣もあったものと思われ、移り住んだ作家がその多くの作品に郊外である代々木の風景について書き記していることからもうかがわれます。

この地図には、その時期渋谷区域に住み、渋谷のことを作品に書き留めた主な文学者の住まいなどを記しています。このほかにも、北原白秋、岡麓、今井邦子、白石実三、小山内薫、中勘助、正富汪洋、宇野浩二といった数多くの文学者が住んでいました。

作成にあたり参考資料として『新渋谷の文学』（渋谷区教育委員会　2005）を使用しました

高野辰之住居跡

豊多摩郡代々幡村大字代々木字山谷167番地（現在の代々木３丁目3番）

唱歌「春の小川」は、住居付近を流れる渋谷川上流の一部である河骨川沿いの散策のうちに作られたといわれています。国文学者であった高野辰之は明治42年（1909）に転居してきて、生涯をこの地で過ごしました。

田山花袋終えんの地

豊多摩郡代々幡村大字代々木字山谷133番地（現在の代々木３丁目９番）

花袋は明治30年（1897）に、国木田独歩らとともに『抒情詩』を刊行しています。親友独歩の住居にはたびたび訪れており、『東京の三十年』には29年頃の上渋谷界隈の風物が描かれています。39年12月には代々幡村大字代々木132番地（直後に133番地に変更）に新居を構え、20年余りを過ごしここで生涯を終えています。

島木赤彦

豊多摩郡代々幡町大字代々木字山谷291・316番地（現在の代々木３丁目）

短歌雑誌『アララギ』の大正期を支えた赤彦は、発行所の転居とともに大正10年（1921）8月に山谷291番地、同年10月から13年3月までは山谷316番地へと居を移しました。

東京新詩社（第四萩の家）

豊多摩郡千駄ヶ谷村大字千駄ヶ谷字大通549番地（現在の千駄ケ谷１丁目23番）

明治37（1904）年11月に中渋谷から千駄ヶ谷549番地の「第四萩の家」に移ります。この地でこれまで発行し続けてきた機関誌『明星』が100号をもって終刊になります。42年1月までの、およそ８年間の渋谷での活動が新詩社の隆盛と衰退の時期となりました。

徳冨蘆花住居跡

豊多摩郡千駄ヶ谷村大字原宿字南原宿178番地（現在の神宮前４丁目９番）

国立国会図書館所蔵

蘆花は随筆家でもあった妻の愛子とともに、明治33年（1900）10月から38年12月までここに住み、『思出の記』などの作品を次々と発表しました。原宿での生活は苦難が多く、愛子と共著の自伝的長編『富士』には、そこでの生活が詳らかに伝えられています。

平福百穂

豊多摩郡千駄ヶ谷町大字穏田字穏田21番地（現在の神宮前5丁目15番）

短歌誌『アララギ』の同人百穂は日本画家として著名であり、穏田の自宅庭先では写生するための鴨と七面鳥を飼っていました。穏田21番地には明治43年（1910）頃から大正3年（1914）頃まで住んでいました。

釋迢空（折口信夫）

豊多摩郡渋谷町大字下渋谷字羽沢189番地（現在の広尾1丁目）

短歌誌『アララギ』や『日光』で活動した釋迢空は、民俗学者としてれ知られる折口信夫の歌人としての号です。大正12年（1923）12月に下渋谷字羽沢の坂の途中にあった家に移ってきて、13年6月に羽沢189番地に転居しました。この「羽沢の家」には昭和3年（1928）10月に荏原郡大井町に移るまで住んでいました。

竹久夢二住居跡

豊多摩郡渋谷町大字中渋谷857番地（現在の宇田川町31番）

夢二は大正５年（1916）10月から翌年１月までは下渋谷字伊達跡1836番地（現在の恵比寿３丁目）に住んでおり、10年8月に中渋谷857番地でモデルのお葉と世帯を持ち、13年12月に牛込に転居するまで住んでいました。自伝小説『出帆』には渋谷での生活が挿絵入りで詳しく描かれています。

与謝野晶子歌碑

渋谷区道玄坂２丁目10番１号

道玄坂上に立つ碑に刻まれている歌は

「**母遠うて 瞳したしき 西の山**
相模か知らず 雨雲かゝる」

晶子が遠く離れた母を思い詠んだこの短歌は明治35年（1902）４月に発行された『明星』に収められています。歌碑は昭和55年（1980）に地元有志によって建てられ、彫られている筆跡は晶子自身の書簡からの集字によるものです。

藤田佳世

豊多摩郡渋谷町大字中渋谷字大和田（現在の道玄坂1丁目）

神奈川県鶴見で生まれた佳世は、大正３年（1914）の３歳の時に一家で大和田に移り、その後、昭和9年（1934）21歳で道玄坂の藤田陶器店に嫁しました。80年余りを渋谷で過ごした佳世は、『渋谷道玄坂』『大正・渋谷道玄坂』などに古き良き時代の道玄坂での生活・風俗・風物を愛着こめて書き綴っています。

東京新詩社跡

豊多摩郡渋谷村大字中渋谷字道玄坂272番地（現在の道玄坂２丁目６番）

国立国会図書館所蔵

東京新詩社は明治32年（1899）に与謝野鉄幹によって結成され、翌年には機関誌『明星』を創刊します。34年5月頃に中渋谷272番地に移ってきて、同年10月頃には中渋谷382番地に転居し、さらに37年５月頃に近くの中渋谷341番地へ移っています。

鉄幹は34年に上京してきた鳳志よう（与謝野晶子）と結婚しており、晶子は歌集『みだれ髪』を同年に刊行しています。37年11月には千駄ヶ谷村大通549番地へと移転します。